
【もしも】ハヤテのごとく！～ヒナギクは同性愛者～【男だったら】

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【もしも】ハヤテのごとく！〜ヒナギクは同性愛者〜【男だったら】

【Nコード】

N4184E

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

もしもヒナが男だったら、と言うのをイメージして書いてみた。歩との入浴が矛盾しますので原作とはリンクしません。

（前書き）

警告：ヒナを崇拜している方は読まない方が良いかもです。キレた
らおしまいですし……。
と、言う訳で、もしもシリーズスタートdeath。

東京都杉並の地を殆ど占める小中高一貫式の名門校、白皇学院。
此処には優秀な生徒達が通っている。

私、桂かつら 雛菊もその一人である。

そんな私には、誰にも知られてはいけない秘密がある。
それは……………。

その日の朝、いつも通り登校すると、校門である男の子と鉢合わせをした。

その男の子は、ふと見ただけでは男に見えないほどの女顔で、水色の髪をしている。服装は制服ではなく執事服。

名は綾崎あやこ 颯。私の好きな男の子だ。

「おはよう御座います、ヒナギクさん」

ハヤテくんは私に微笑みながら挨拶をして来た。

なので私も同じ様に笑みを浮かべて挨拶を返す。

「おはよう、ハヤテくん」

私は彼の隣に居る金髪ツインテールの少女、三千院さんぜんいん 凪に顔を向ける。

「ナギもおはよう」

「ぬつ、『も』とは何だヒナギク!？」

意味も無く怒って睨むナギ。無視しておこう。

「あ、そうだ。ハヤテくん、この前貴方に貸した電車賃なんだけど」
「ああ、すっかり忘れてました」

ハヤテくんは財布を取り出すと、舞浜から練馬までの金額を抜いて私に差し出す。

私はそれを受け取り、自分の財布を出して仕舞う。

「じゃ、私は生徒会室に寄ってから行くから、後でね」

私はそう言つて、その場を後にして生徒会室に向かった。

生徒会室に着くと、お馴染の三人、朝風^{あさかせ} 理沙、花菱^{はなびし} 美希、瀬川^{せがわ} 泉が走り回っていた。

「貴方たち、生徒会室ではしゃぐなと何回言ったら解るの!？」

三人は私に気付くと、驚いて固まった。

「ヒナ、いつからそこに？」

理沙が言った。

「今よ」

そう答えると、三人が集まり出してコソコソと何かを始めた。

「貴方たち、何をコソコソと？」

その問いに三人は笑顔で「何でもない」と答える。

「そう」

私は会長の席に向かって歩いて行く。

「ちよつと待てヒナ！」

理沙が私の行く手を阻む。

「何よ？」

「此処から先に行つてはいけ……」

理沙がそう言い掛けた所で、私は彼女を退かして進んだ。
すると今度は美希が行く手を阻む。

怪しい、そう思った私は、三人に問い質す。

「何が遭つたのか、包み隠さず話して貰おうかしら？」

「別に何も無いよお」と泉。

「美希、話してくれる？」

私の問いに美希が口を開こうとすると、理沙が慌てて駆けて来て塞ぐ。

これは何かあるな、と私は悟った。

「貴方たち、怒らないから素直に話して頂戴」

そう要求すると、泉が言った。

「三人で追い掛けっこして遊んでたらヒナちゃんの大切なティーツプを壊しちゃった」

その言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが切れた。

「……………」

無言で俯く私。

「ヒナちゃん？」

泉が私の顔を覗いて来る。

「誰が壊したの？」

「理沙ちゃん」

私は理沙を睨め付けた。

「理沙、二人きりで話しましょう？」

脅えて震える理沙は首を横に数回振るう。

「理沙！」

私が怒鳴り散らすと、理沙は割れたティーカップを取り出した。

「すまんヒナ！ 弁償するから許してくれ！」

「美希と泉、外れてくれる？」

泉は「はい」と返事をして美希と共に出て行った。

「弁償ですって！？」

私は理沙の胸倉を掴んだ。

「これはハヤテくんが私の為に作ってくれた世界に一つしか無いティーカップなのよ！ それを弁償だなんて無理に決まってるじゃない！ 大体貴方は何回私の物を壊せば気が済むの！？」

「……………」

理沙は無言を回答に涙を浮かべる。

「泣いたって駄目よ！ 今日と言う今日は絶対許さないんだから！」

私は理沙を突き放し、正宗を手にして襲い掛かる。

「辞めろヒナ！」

避ける理沙。

「ちっ！」

私は舌打ちをすると、再度攻撃。が、また避けられて当たらない。

「俺の攻撃を避けるとは貴様、中々の手練だな」

「え、俺？」

疑問符を浮かべる理沙。

私は慌てて口を塞いだ。

……実は私、興奮すると口調が戻ってしまうのだ。

え、意味が解らない？　なら教えよう。

私、ヒナギクは男なのである。

しかし、この事は絶対にバレてはいけない。もしバレでもしたら、私にオカマのレッテルを貼られてしまう。それだけは絶対に避けたい。でないと回りの人たちが確実に私を避ける様になる。

おっと、今まで私を女の子だと思っていた読者。どうか私を避けないでくれ。

「ヒナ、今『俺』って言わなかった？」

「な、何を言ってるのよ？　聞き違いに決まってるじゃない」

私は冷や汗を垂らしながら言った。

「その割には随分と動揺している様に見えるが……」

「そ、そうお？」

拙い。とてもピンチだ私。

「えっと、今日のところは勘弁してあげるから。それじゃ！」

私はそう残すと慌ててその場を後にした。

時計塔を出た私は、教室にやって来た。
ガーデンゲート

するとハヤテくんが現れて言った。

「ヒナギクさん、そんなに汗掻いてどうしたんですか？」

「ちょ、ちよつとね……」

「……………」

ハヤテくんは疑問符を浮かべた。

「それよりハヤテくん、宿題やった？」

「あ、忘れました」

「はあ……。駄目じゃない、やって来なきゃ」

「そう言うヒナギクさんはやって来たんですか？」

「私？ 私は……」

やってない様な気がする……。

「ひよつとしてヒナギクさんですか？」

「そうなのよ。昨日は夜までバイトで宿題やる暇が無くて」

私は席に着き、鞆を置いて数学のノートを取り出して開いた。

やはり、昨日出された宿題はやっていなかった。

私はノートを仕舞い、席を立てて廊下に出る。

「何処行くんですか？ もう授業始まりますよ」

「サボるわ。宿題やってないで廊下に立たされるのは嫌だから」

「僕もご一緒させて下さい」

「駄目よ。貴方は廊下に立たされてなさい。……なんて冗談よ。で、何処でサボる？」

「……………」

「……………」

何処も思い付かなかった。

私たちは諦めて教室に戻り、授業が始まるのを待ち、先生に宿題をやっていない事を素直に話し、廊下に立たされる。

「あの、ヒナギクさん」

「何？」

「この前、二人で遊園地に行ったじゃないですか。その時の帰り、何て仰ったんですか？」

その問いに私の体温が急上昇した。

「えっと、何て言ったかしら？ 忘れたわ」

「そうですか。では思い出したら教えて下さいね」

覚えてるけど言えないよそんな事。

「所で、さっき下駄箱にこんな物が入ってたんですけど」

そう言つてハヤテくんは封筒を取り出した。

「何それ？」

「ラブレターです」

「差出人は！？」

「それが書いてないんですよ……」

そう言ってハヤテくんは肩を竦めた。

「虎鉄くんだったりして」

と、「冗談を言ってみたりするが、ハヤテくんは真に受けて嫌そうな顔をする。

「辞めて下さい。僕があの人を嫌いなもの知ってるでしょう？」

「冗談よ。それ、実は私が書いたの」

嘘だけど。

「え、ヒナギクさんが？」

ハヤテくんは赤面するが、直ぐに顔色を戻して首を振るう。

「有り得ませんよ、そんなラブコメみたいな展開」

真っ向から否定された。ちよつと残念。

「貴方っていじつても面白くないわね……」

「からかってたんですか？」

「うん。それより、手紙には何て書いてあるの？」

「読みます？」

ハヤテくんは封筒を私に差し出した。

私はそれを受け取り、中から便箋を出して読む。

好きです。付き合ってください。剣道部部室で待ってます。

成る程。大体察しが付いたわ。

「捻り潰して来なさい」

「はい？」

「これは果たし状よ。恐らく、東宮くんね」

「どうして東宮くんがこんな事を？」

「リベンジじゃない？」

「……………」

沈黙するハヤテくん、移動を始めた。

「何処行くの？」

「トイレです」

「そう」

私も行こう、と横に並ぶ。

目的地に着き、共に男子トイレに入り、仲良く並んで立ち小便……
って、何してるのよ私は!?

「ヒナギクさん、男だったんですか?」

バレた! 否、未だよ。未だ誤魔化せるわ。

「皮下脂肪よ。女の子はある程度背が伸びると皮下脂肪が付いて前に飛ばなくなるのよ。でも私の場合、未だにそれが付いてないからそれに、一度やってみたかったし。立ち小便」

「……………」

ハヤテくんが無言で眉根を顰めて私を見詰める。

な、何か嫌な予感がするわ。

私は小便を終わらせると、慌てて一物を仕舞……おうとしたが、既のところで排泄が終了したハヤテくんにスカートとスパッツをずり下ろされ、股間を見られた。

「信じたくはありませんが、本物ですよね?」

その問いに私は無言で頷く。

白眼視はもう確実ね……。

「大丈夫です」

「は?」

「ヒナギクさんがオカマだと言う事は誰にも喋りません。僕も同志ですから」

言ってハヤテくんはニカツと笑う。

「同志?」

「ええ、僕も女装が趣味なんです」

「……貴方、それは人としてどうかと思うわよ」

「……………」

ハヤテくんは沈黙した。

「まあ兎に角、私が男だって事は二人だけの秘密よ」

私はそう言うと、一物を仕舞って手を洗い、男子トイレを出た。

「はぁ……………」

溜め息を吐き肩を竦める。

ハヤテくんにはバレちゃったな……。

「桂先輩」

そう呼ばれた私は、驚いて背筋を伸ばした。

「な、何かしら？」

恐る恐る声の方を見た。

そこには、1年の日比野^{ひひの} 文とインド人のシャルナが居た。

「男子トイレから出て来ましたけど、男だったんですか!？」

文の問いにシャルナが突っ込む。

「文ちゃん、何かの見間違いよ。女の子が男子トイレから出て来る訳無いでしょ？」

「でも文は見ました! 桂先輩は確かに男子トイレから出て来ました!」

「文ちゃん、いい加減にしないとグーで叩くわよ」

シャルナはそう言って拳を作ってみせる。

「見間違いですか……。あ、そうだ。桂先輩、ハヤテ先輩を見ませんでした?」

文が訊ねると同時に、トイレからハヤテくんが出て来る。

「呼びましたか？」

「ハヤテ先輩、どうして来てくれなかったんですか？」

「え？」

「文の手紙、読んでくれなかったんですか？」

その問いにハヤテくんは封筒を取り出す。

「これ、日比野さんが？」

この時、私は思い出していた。

以前、文に訊かれた事がある。

それは、ハヤテくんを呼び出す方法である。

その時、私は文に、『剣道部の部室に来るよつに言えば必ず来てくれるわよ』と答えた。

私はハヤテくんに申し訳ないと思った。

「えっと、どうやらお邪魔みたいだから、私は先に戻ってるわね」
そう言ってその場を離れようとする、ハヤテくんが腕を掴んで引き留めた。

「日比野さん、貴方のお気持ちは解りますが、僕には付き合ってる人が居るんです」

え？

「僕、今ヒナギクさんと付き合ってるんです。だから日比野さんの気持ちには答えられません」

その言葉に、私の心臓が高鳴った。

「そうですか……」

文はシヨックで肩を竦めると、シャルナと共に立ち去る。

「は、ハヤテくん、貴方気は確か！？ 私、男よ！？」

「確かですよ。ああでも言わないと諦めてくれなさそうだったのですみません」

「いや、別に謝らなくても良いけど……。て言うか、あんな事言われたら私、本気にしちゃうわ」

「それは困りますね。僕、男には興味ありませんから」

そう言われ、シヨックを受けた私は崩れ落ちた。

女になりたい。心じゃなく、肉体的に。

「どうしました、ヒナギクさん」

「……ねえ、ハヤテくん。もし、もし私が貴方を好きって言ったらどうするかしら？」

「……………」

ハヤテくんは無言で後退る。

私はすっと立ち上がると、離れるハヤテくんに近い抱き締めた。

「ちよっ、ヒナギクさん！」

ハヤテくんは私の腕の中で暴れた。

「放して下さい！ じゃないと殺しますよ！？」

「良いわよ、殺しても」

「……………」

「真剣なの。私の気持ちに答えて」

「嫌です。気持ち悪いです。放して下さい」

私は真剣な表情でハヤテくんを見詰める。

この唇、どんな味がするのだろう。奪いたい。

私は、思い切って目の前にあるハヤテくんの唇に自分のを重ねた。

「……………!？」

吃驚するハヤテくん。

「ぷはっ」

私はハヤテくんから唇を離した。

するとハヤテくんは、「うえっ」と吐き気を催した様な顔をした。

「ヒナギクさん、貴方も虎鉄さんと同じですね」

「惚れた状況が違うわ。虎鉄くんの時 は 女装をした貴方だったけど、

私は女装をしていない貴方に惚れたの」

「そんなの関係なくキモイです」

「そんな事言わないで。傷付くわ」

「貴方がどうなろうと僕には関係無いですよ。あーキモイキモイ」

そこまで言われると流石にムカついて来る。

「ハヤテくん、どうして男同士は嫌なの？」

「同性愛者には解りませんよ」

「……………」

返す言葉が見付からない。

私はハヤテくんを放し、「戻ってるわね」と残して教室に向かった。

教室の前に着くと、授業終了のチャイムが鳴った。

私は中に入り、席に着いた。

すると、ナギがやって来て言った。

「ヒナギク、ハヤテは一緒じゃないのか？」

「もう来ると思うわ」

そう言っ て 入り口を見ると、案の定ハヤテくんが入って来た。

ナギはハヤテくんに駆け寄ると言った。

「ハヤテ！ 廊下に立たされたと言うから心配したぞ」

「……………」

「ハヤテ、顔色が悪いぞ。どうした？」

「実は第二の虎鉄さんが出まして、執拗に迫られました」

ハヤテくんはそう言っただけ私をチラッと見る。

私はハヤテくんに微笑んだ。

するとハヤテくんは慌てて目を反らした。

「第二の虎鉄？」

ナギが疑問符を浮かべる。

「しかも無理矢理キスを……………」

「なぬっ！？ 何処のどいつだ！」

ヒナギクさんです——ハヤテくんがそう言おうとした瞬間、私は手早くシャーペンを取り出し、芯を折って彼に飛ばす。

「いたっ！」

芯はハヤテくんの頬を直撃した。

「何するんですかヒナギクさん！？」

「ごめん、態とじゃないの。許して？」

「何だ。随分と仲良しだな、お前ら」

「そりゃそうよ。私たち、付き合ってるんだもの」

「何！？」

「お嬢様、嘘ですよ！ 信じないで下さい！」

「先刻、キスをしたわ」

「なっ、キス……………」

ナギは白眼を剥いて固まった。

「ヒナギクさん、ちょっと……………」

ハヤテくんは廊下に出ると私に手招きをした。

私は席を立ち、ハヤテくんの下に移動する。

ブンッ！

ハヤテくんがいきなり殴り掛かって来た。

私はひらりとかわして訊ねる。

「何するの？」

「貴方を今此处で殺します」

ハヤテくんはそう言って光弾のようなものを放ってきた。

私はそれを受け止めて投げ返す。

「うわっ！」

自分の攻撃でダメージを受けるハヤテくん。

「貴方、少し弱くなっただんじゃない？」

「……………」

ハヤテくんは無言を回答に、近付いて私の鳩尾に拳を埋めずめた。

「全然痛くないんだけど……………」

私はそう言うと、仕返しにハヤテくんの股間を蹴り上げた。

ハヤテくんはとても痛そうな顔をしながら股間を押さえた。

「貴方が襲ってくるのが悪いのよ」

「五月蠅いですよ！」

ハヤテくんは私を睨め付け、教室に入り、鞆を持って出て来る。

「あら、帰るの？」

「……………」

ハヤテくんは私の問いを無視して去っていった。

私はそれに胸騒ぎを感じた。何も無ければ良いのだが……………。

放課後、生徒会室でお茶をしていると、携帯電話の電子音が鳴り響いた。メールの着信音だ。

私は携帯を取り出し、受信箱を開いた。新着1件、愛するハヤテくんからだった。本文を開いてみる。

貴方に頼むのは不本意ですが、この際仕方ありません。僕は今、何者かに捕まって何処かの部屋に閉じ込められています。部屋には窓が一つありますが、僕の体では抜け出す事は不可能みたいです。貴方だけが便りです。どうか、僕を助けに来て下さい。

私は返信画面を開き、携帯のGPSで現在地を確認してと送った。すると、数十秒後に返事が来た。

僕の携帯にはGPSが搭載されていません。ですが、此处が何処かの海沿いである事だけは窓の外の景色で判ります。

私はこれに対し、何か目印みたいなのはあるかと返事をした。

*

ある湾岸沿いに、今は使われていない廃墟と化した倉庫がある。ハヤテはその中に閉じ込められていた。

どうしてこうなったのか。遡る事数時間。学校を早退し、屋敷に向かっている途中、後ろから何者かに襲われ、気が付いたら此处に居たという。つまり何も覚えていないと言う事だ。

ハヤテは携帯を取り出して開いた。待ち受けに気になる人の写真が設定されている。

（そう言えばこの人、男だったんだよねあ……）

ハヤテはそう思いつつ、電話帳を開いて気になる男のメールアドレスを呼び出し、メール作成画面に移行。本文を打ち込み、送信する。

（返事くれるかな……）

そう思っているとメールを受信した。気になる男からだった。

ハヤテは返事の内容を読み返信。次の返事を待った。

その直後、部屋の扉が開いて何者かが入って来た。

「貴方は一体!？」

ハヤテが訊ねると、何者かは近付いて来た。その何者かは接近するにつれ、シルエットがはっきりしてきて、漸く正体を曝す。

「虎鉄さん？」

「目が覚めたか、綾崎」

泉の双子の兄、瀬川^{せがわ} 虎鉄は興奮して言った。

「お前が此処に居る理由は解るな？」

「え、貴方が連れて来たんですか？」

「その通り。お前を好きなあまり拐ってしまったのだ」

「……………」

ハヤテは虎鉄を細い目で見詰める。

「さて綾崎、儀式を始めようか」

「儀式？」

「お前を本当の女にする儀式だ。つまり手術だな」

虎鉄はそう言つて、懷から注射器やメスなど、ドクターが使う手術道具と同じ物を取り出した。

「綾崎、暫く眠つて貰うぞ」

そう言つて虎鉄は、注射器をハヤテの腕に刺した。

容器内の麻酔液が体内に入り、ハヤテの意識を奪う。

「ヒナギク……さん……」

ハヤテはそう呟き倒れた。その直後、入り口が突然壊れた。

「誰だ！？」

虎鉄が振り向いたその先には、ハヤテの携帯の待ち受けになっていた人物が、木刀を持って立っていた。

*

湾岸沿いにある廃墟と化した倉庫の前にやって来た。この中からハヤテくんの匂いがする。

私は正宗を手にし、扉を破壊して中に入った。

奥にハヤテくんが横たわっており、その横に刃物を持った虎鉄くんが居た。

「誰だ！？」

驚いて振り向く虎鉄くん。

「白皇学院に生徒会長が居る限り、この世に悪は栄えない！」

そう言っただけ飛び上がり、空中で前転をして虎鉄くんの前に格好良く着地し、「正義の味方、桂 雛菊只今参上！」とファイティングポーズを決めた。

「誰かと思えば桂か。何の用だ？」

「ハヤテくんを返して貰うわ」

私はそう言っただけで正宗を振るって斬撃波を飛ばした。

しかしそれはフェイク。私は間髪を容れず虎鉄くんの背後に回り込んだ。

「消えた!？」

驚き戸惑う虎鉄くん。

「後ろよ！」

私は正宗を振り被り、一気に振り下ろした。

「うっ！」

正宗が虎鉄くんの首を捕え、気絶させる。

私は正宗を置き、ハヤテくんに近付いて体を揺さ振る。

「ハヤテくん、起きて」

「う……う……」

徐に目を開けるハヤテくん。

「ヒナギクさん……」

ハヤテくんは起き上がると、私に抱き付いた。

「助けに来てくれたんですね！」

「うん、メール貰ったから」

「どうして判ったんですか？ この場所」

「泉が教えてくれたのよ。『虎鉄くんがハヤ太くんを東京湾沿いにある古い倉庫に閉じ込めた』ってね」

「そうですね。有り難う御座います」

ハヤテくんはそう言っただけで、頬にキスをしてきた。

「これは助けてくれたお礼です」

「……………」

血圧が上がる私。

「えっと……………」

言葉が出なかった。

「あの、ヒナギクさん」

「え？」

「僕、ヒナギクさんが男だって分かってから、ずっと考えてたんですけど、僕女になります」

「は？」

私は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした。

「女になって、ヒナギクさんの気持ちに答えます」

「あ、そう……………」

「ダメ……………ですか？」

「ダメ。男の子のままでいて」

「でもそれじゃあ、結婚出来ませんよね」

「け、けけ、結婚！？ 貴方、気は確か！？ だってハヤテくん、言ってたわよね。私の事嫌いだって、キモイって」

「本心じゃないです」

「ハヤテくん……………」

私は抱き締め返した。

「一つだけ、方法があるわ。オランダへ行くの。そこなら、同性婚が認められてるわ。どうする？」

「行きます」

私たちは互いに見詰め合い、そして……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184e/>

【もしも】ハヤテのごとく！～ヒナギクは同性愛者～【男だったら】

2010年10月8日10時38分発行